

猿新聞

編集・発行者
山村 準
tel:0595-63-1725
Email
jyun.y@asint.jp

山を忘れた？

人里依存ザル

ニホンザル（以下、サル）が、人間の居住エリアに侵入するようになるまで、じつに20年余の年月が経っています。

それまでは、主に奥山の広葉樹林帯をテリトリーとして利用していましたが、針葉樹林も休息や泊まり場として利用してました。

いま、人里近くで暮らすサルは、奥山の暮らしを知りません。生まれた時から人目を盗んで畑の作物を食べて、その美味しい味を知っているサルばかりです。



おばあちゃんと仲良く日向ぼっこ
ここまで人慣れが進んでいます
写真提供 古川高志さん

サルは、「北限のサル」に代表されるように、寒さには非常に強く、下北半島のような極寒のなかでも生活ができます。

だが、冬は餌不足でオトナザルでも餓死する個体が出ます。体力のない1年

目の子供は、半分くらいが死んで冬を越せないといわれています。このようことから、サルにとって秋が最も大事な季節となります。

秋に越冬に必要な皮下脂肪を蓄えておかないと、餌不足になる冬場は生き延びられません。また、サルは秋に妊娠しますが、餌が悪く体脂肪が少ない状態では子供を産めません。

山の餌だけを食べているサルの個体数増加率は、1年にわずかに1%です。100頭の群れでも翌年は101頭にしかなりません。

これが本来のサルの姿です。このように、サルは自然の状態であれば、自然淘汰され増えすぎるということはありませぬ。

一方、農作物依存ザルは、生態が全く変わってしまします。人里のサルは、子供の時から、毎日、

栄養価の高い農作物を食べているので、早く性成熟して初産は4、5才と早く、秋には、栄養豊富なイモやマメを沢山食べますから、ほとんどのメスが妊娠可能な体脂肪を蓄えていて毎年出産。それに加えて冬の死亡率も下がります。農作物に依存しているサルの平均増加率は、10%以上、最大で3%くらいになるともいわれています。

100頭の群れは、自然の状態だと翌年101頭にならないのに、農作物を食べるようになる113頭に増えます。農作物被害は、そのみに止まらず、野生動物の出産率の向上や、幼獣死亡率の低下など、個体数増加を助長する結果になっています。

農作物被害が増えれば、サルが増えれば被害が増えるという負の連鎖が起こっています。サルが、人里に依存し、山の暮らしを忘れてしまっている現状では、効果的な対策を立てるのは非常に難しいと思います。

まず立ち止まり、集落内の誘引物の除去や環境整備、防護柵や追い払いの徹底、最後に有害捕獲と、対策の原点に戻り初歩からやり直す必要があります。獣害対策の基本は初歩対策の徹底です。

10月下旬、矢川でザル1頭が柿を食べているのを目撃し、受信機で群の気配はなく、子ザルの単独行動だと思われまします。

体型は猫を一回り小さくしたほどです。名張B群の大量捕獲が行われたのは、今年1月頃で、捕獲後の推定生息数はハナレ3頭、オトナメス1頭、コドモ1頭、アカンボ5頭となつています。

サルの交尾期は9、12月、出産期は3、6月です。これから推測すると、B群では本年度の子ザルは存在せず、目撃した子ザルは母ザルのいない27年産の孤児と考えられます。

みなしハナレ



一般的には子ザルは、母ザルを通して社会のなかでオトナになり、母ザルの個性によって、その過程は変わり母子関係が、子ザルのその後の行動や生きざまを形作る（かたちづくる）ことが知られています。

母ザルの養育方法にも個性があり、そしてこれらの養育態度が母ザルから娘へと次世代に伝達されていきます。

孤児ザルは、後ろ盾となる母ザルがいないことで、低い順位しか継承できないことが多くともいわれています。

ここで、京都嵐山での孤児ザルの成長例を、大阪大学人間科学研究科の大学院生、鋤納有実子さんの話を紹介しましょう。

1頭の孤児の子ザルの話。その子の母親は8か月の時に怪我が原因で群れから姿を消しました。

その後、その子の採食の時間は3倍に増え、社会的遊びや一人遊びの時間が減りました。

母乳がもらえなくなつたことで、より多くのえさを自分で見つけねばならなくなつたことを意味しています。

他のサルとの関係に注目すると、母親という仲介者を失つたため、大人のサルとのかかわりが減つたが、子供のサルとの関係に変化はありませんでした。

また、今までは母親に毛づくろいをしてもらっていたのが、別の個体が代わりに毛づくろいをしてくれるようになりました。つまり孤児ザルの世話をしてくれるサルが現れたのです。

シカ個体数管理

近代に入ると、日本の山には、人間界と野生動物のエリアを隔ててきた里山という、緩衝帯がありました。

当時の自然界には食物サイクルがあり、種の多様性を保ちつつ、野生動物の数もほどよい範囲で保たれ、長い人間の暮らしと野生動物がうまく共存していたのです。



冬野菜の被害の季節です！

冬場の獣害対策

増えすぎたシカの個体数を一定数まで、軽減させることが被害軽減の必須要件です。これまで捕獲個体はほとんどが廃棄されていましたが、自然資源・山からの贈り物と捉え、シカ肉の有効活用も今後の大きな課題です。シカ肉の有効活用は地域の活性化にもつながります。

尚、個体数管理は、長い目で見ると保護につながるという一歩を、念のために。

野生動物にとつて、これから春まで、山に餌が少なく厳しい時期になります。これからの時期、集落内で動物に餌を与えないのです。



大根を食べるサル

てしまうような行為をなくすことが、とても重要なことです。

山で餌が少なくなる冬場こそ、集落内で野生動物に餌となるようなものを与えてはいけません。

秋はイノシシやシカの交尾期です。厳しい冬場を乗り越えて、晩春に出産を迎えます。妊娠期の栄養状態が産率や生存率に大きく影響します。山に餌の乏しい秋から冬にかけて集落で野菜などの被害が出るということは、春先の産率の助長につながっているともいえます。

集落近くで得られる餌には、栄養価が高いものが多いため、動物たちは若齢で発情し、一度に産まれる子供の数も多くなります。多くの野生動物にとつて秋は、子孫を産み育てるために、栄養を蓄える大切な季節です。「食欲の秋」は何も人間だけに限ったことではありません。「エサの量によってシカの生息数が決まる」

かかし 案山子の話

古くは、鳥獣に田畑を荒らされるのを防ぐために、髪の毛やボロ布を焼いたものを置き、鳥獣が嫌がるにおいを出して近づけないようにした。これを「かがし」といった。においを嗅がせる意の動詞「かがす（嗅がす）」の名詞形。現在もそうしたものを言い、それを「かがし」と呼ぶ方言もある。

やがて、竹やわらでほぼ等身大の人形を作り、弓矢を持たせたり、蓑笠（みのかさ）をかぶせたりして田畑に置き、人間が見張りをしているように見せかけ、鳥獣の侵入を防ぐようにした。この人形も「かがし」、または清音化して「かかし」というようになった。

ちなみに、名張鳥獣害問題連絡会HPの表題名は「やまだのかかし」です。

意図的餌付け 非意図的餌付け

近年、起きていいるサルによる被害の原因は、「無意識の餌付け」が大きな要因だといわれています。人間が非意図的だが耕作地に誘引しておきながら、耕作地から排除しようと本末転倒の対策を行っているのが現状です。「無意識の餌付け」は、場慣れを進化させ、また「意図的餌付け」は人馴れを進めます。

二ホンザルには性成熟に達するとオスザルが群れを離れたり、隣や遠方の群れに移っていく習性があります。このオスザルが場馴れや人馴れを他の群れに伝播して、他の個体も追随することになり、場馴れ・人馴れがさらに拡大していきます。サルの場合、人慣れの進展は、非意図的

サルの出没状況

名張A・B群

11月の動向 A群は、先月の後半は青蓮寺ダムから比奈知ダムへの移動ルートに比奈知・奈垣がなっていたと思われ、近頃は人慣れが進み車にも慣れていきける様に思われます。

今月も栗・柿等を採食しているところを何度か目視しています。B群は、先月後半から今月にかけて、室生地区の蔵・西谷集落に滞在し、今月から名張地区の竜口・赤目滝（長坂）方面に移動し柿等を採食しているところを目視しています。

1・2日ほど確認できない日があり「今井林道の奥」や「室生山上公園の奥」まで移動していたのではないかと考えられます。

今月も、国道165号線の南側を中心に活動しています。

両群共に、交尾期をむかえ、顔や尻の赤みが増しているようです。

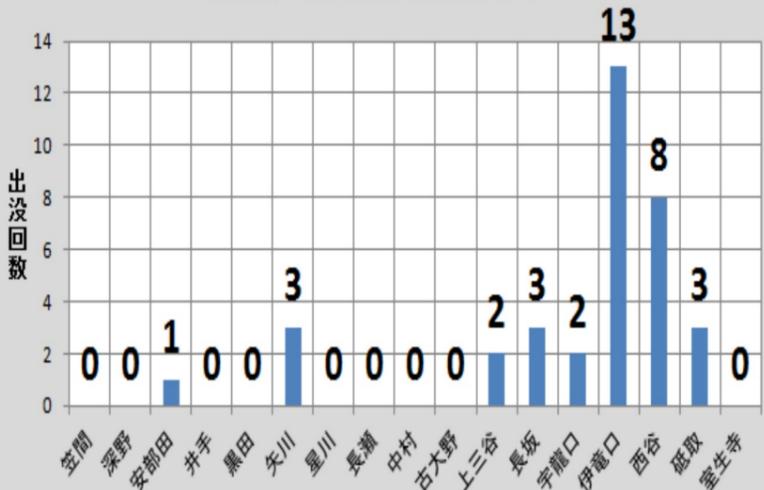
編集局より

年末にあたり

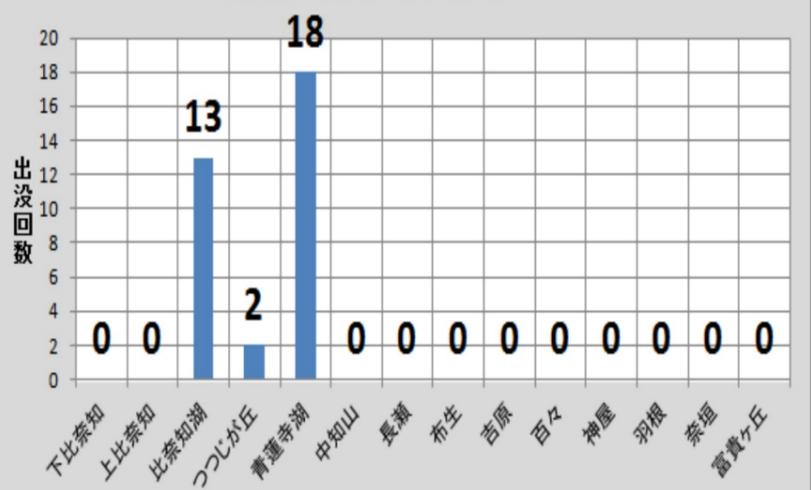
まずは、今年一年間、ご愛読いただきありがとうございました。来年は、創刊以来十年目になり、次なる区切りに向けてのスタートの年になります。気分を一新して、フレッシュな気持ちで活動を継続していきたいと考えています。

まだまだ、至らぬ点の多い新聞ですが、今後とも、応援をいただければと思います。

名張B群移動状況グラフ



名張A群移動状況グラフ



名張鳥獣害問題連絡会 発行部数
 錦生地区：100部
 目地区：200部
 箕輪地区：70部
 ひなち・富貴ヶ丘：150部
 つつしが丘：430部
 市民センター：120部
 12地区
 名張市議会：20部
 名張市役所：20部